

第十五話 悩ましきコレクター魂（上）

●ゴールがあるからこそ人は集める

小学一年生から四年間続いた「怪獣スクラップ」に始まり、仏像、エロ、トンマ、ボブ・ディラン、カスハガなど、「マイブーム」と名づけたコレクションを続けている。そんなみうらじゅんが膨大なコレクションを持つ人物から聞かされたのは「コレクターっていうものは、“オール・オア・ナッシング”ですから」という言葉だった。その心は、「九九は〇に等しく、一〇〇集めるために全ての人生を費やしてしまう（後略）」。

これはコレクター心理の的を射た名言だろう。

書籍が送られてくる封筒や、クッキーの缶のなかに使われる、あれは何と呼ぶのか、ビニールにイボイボの空気を封じ込めた梱包材があるが、あのイボイボを指で潰し始めるときりが無い。プチプチと指でへこませて行くと、最後のひとつまで徹底して潰してしまう。そんな経験を持つ人もいると思うが、あれが「コレクター心理」なのである。

もし、あの「プチプチ」梱包材（と、とりえず呼んでおく）が、畳四畳半分もの大きさがあれば、誰もすべてを潰そうとは思わないだろう。せいぜいB4ぐらいの大きさで、時間も指の負担もさほどではない。ゴールが見えている。だからこそ、人は挑戦する。

無制限のコレクションは、普通、ありえない。たとえば、本の場合、これまで世に出た本をすべて集めようという人はいないのである。ジャンルや、個人の作家、あるいは短期間に活動した出版社、シリーズものといった、限定されたくくりがあって、その範囲内で人はゴールを目ざすのである。

岩波文庫の全点蒐集を試みている人は大勢いると思うが、これなど、本のコレクションのなかではわかりやすい、力の入れ甲斐のあるケースだろう。絶版品切も多いから、実現不可能ではないが、けっこう時間がかかる。そのために別に部屋を借りなければならないほどの量でもない。また、いちおう全点蒐集が終わっても、品切の復刻版や、カバーの有無のバージョン違いなど、新たな蒐集対象が枝葉を広げて、楽しみは尽きない。また信頼されるべきテキストの質の高さも保証されている。ある意味で、わかりやすいコレクションだと言える。

「エロ」や「トンマ」、「カスハガ」といったコレクションは、みうらじゅんだからこそ大っぴらにできることで、一般の人はなかなか知人には告げにくい。酔った勢いでも、「少年時代から、ヌード写真を切り抜いて、スクラップしたのを捨てずに持っている」と言える勇気を持つ人はそうはいない。

だが、人には言えないからこそ、蒐集に血道を上げる心理が働く場合もあるから、コレクターは複雑だ。

●そこから始まるコレクション

名うてのコレクターといえど、最初はみんな、普通の読者であり、普通の本好きだったのだ。私はよく、自分は古本のコレクターでもマニアでもない、と人に言う。じっさい、蔵書のどれを取っても、完全に揃っているテーマのものはない。そういう意味で、死後に処分しても二束三文だと承知している。

小林信彦の著作は、いまや入手困難な晶文社時代の『東京のロビンソン・クルーソー』を始め、各種バラエティブックや、そのほかの単行本や文庫など、わりあい揃っている方だが、それでも八割ぐらいか。森英俊・野村宏平編著『少年少女 昭和ミステリ美術館』（平凡社）は、おもに戦後に出た児童向けのミステリ本のコレクションを、カラー書影をふんだんに使って紹介した本。鬼気迫るといい蒐集ぶりに頭が下がるが、たとえばここに掲載されている、昭和四十五年に出た「サンヤング・シリーズ」（朝日ソノラマ）の小林信彦『オヨヨ島の冒険』を、私は知らなかったし持っていない。こうなると、小林信彦コレクションの「八割」という数字にも自信がなくなってくる。とうてい、コレクターなどは言えないのだ。

ただ、推定二万冊という、貯め過ぎた蔵書の山を見るとき、コレクター気質がないとは言えない。健全なる（と言えば語弊があるが）読書家なら、何もここまで本を集める必要はないからだ。

私が良識ある（と言えば、な語弊があるが）読書家の領域をはみ出してしまうのはこんな時だ。

近著『古本道入門』（中公新書ラクレ）にも書いたのだが、ある時、カバーを剥けば同じ文庫を一举に三冊買った。新潮文庫版『江戸川乱歩傑作集』で、時間差があって出されたこの三冊は、すべてカバーが違う。本文と解説は同じ。改版はあっても改訂はない。映画化にあわせたバージョンなど、カバーが掛け代えられたのだ。これはおもしろい、と三冊とも買った。ちょっと得意だった。

しかし、読むだけなら、もちろん一冊だけでじゅうぶん。もっと言えば、過去に何度か、『江戸川乱歩傑作集』は買っているから、そのうちの一種類は、部屋を一日かけて探せば見つかるはずなのだ。それでも、とりあえず三冊揃えて買うことが、すでに書くネタになると思って、わずらわしい考えはふり捨ててことに及んだのだった。

ここから、コレクションの険しくも楽しい道が始まるのだ。蔵書家とコレクターを分ける分岐点と言ってもいい。ただ、私の場合は、一つのことを徹底して、しつこく追いつける根気が絶対的に欠けている。熱しやすく冷めやすい。真のコレクターはゴールにたどりつくまで「冷め」たりしない。

そんな私でも、古本買いは「冷め」ないし、この先も古本は買い続けるだろう。

家に本棚がせいぜい一つ。文庫では、中身が同じでもカバーが違う場合がある、なんて

ことは知らないし、興味もない。それが普通の人である。それでも立派に、幸せに生きていける。

ところが我々は違う。常人には理解できないだろうと思えることを、古本の沼に腰まで浸かった者は安々としてしまう。とくにコレクターと呼ばれる人種は、沼に首まで浸かって溺れかかっても、けっして自分からは沼の外へはいあがろうとはしないのである。これが「蔵書の苦しみ」の根源でもある。

●男はなぜモノを集めたがるか？

雑誌「太陽」の一九九八年八月号が「特集 コレクター 家宝者大集合!!」で、本章を書くのに、ずいぶん恩恵を受けている。「永遠のマイブーム」には、十五人のコレクターが登場。「ネオンクロック」「椅子」「鳥の羽根」「ビリケン」「美術品・民具」などなど、果ては「染付便器」という和式の陶器による便器の蒐集家までいて、感心を通り越してあきれらるばかり。

ここで問題にしたいのは、十五名中、女性は「万華鏡」「ベッツ」の二名だけで、あとは男性、ということだ。これで、コレクター全体に占める女性のパーセンテージが十五分の二、とは言えない。雑誌編集側からすれば、すべて男性というのはバランスが悪く、女性を何人か混ぜたいと考えるわけで、たぶん苦労して探し出して押し込んだと思われる。

根拠のない想像の数字だが、コレクターの男女比は、百対一ぐらいになるはずだ。圧倒的に「男性」優位（劣位？）の世界なのだ。それでも、二十年前、三十年前に比べれば、古本の世界と同じく、これでも女性の姿が目立ってきたと言えるほどだ。

骨が太い、髭が生える、精液を製造するなどと同じく、モノを集めたがることは、男性を女性と区別する、顕著な特徴の一つとっていいだろう。

ずいぶん昔の話だが、雑誌の取材で、ある心理学者に「男はなぜモノを集めたがるか？」というテーマで話を聞いたことがある。某氏によれば、「コレクター心理」とは次のようなことだったと思う。

一、狩猟時代のDNA

石器時代、われわれ祖先は穴蔵に住み、食糧は自己調達していた。家族のなかでは、それはオスの役割で、妻や子、あるいは年老いた父母のため、狩りに出たり、海辺で魚貝を穫ってくる。しかし、冬になれば、食糧調達は困難になる。そこで、冬が近づくと、オスはせつせと、来るべき困難期に備えて、なるべくたくさん食糧をかきあつめてきて、それを貯めようとする。

いま必要な量以上のものを、つねに捕獲して、できるかぎり貯めようとする——このオスの役割が、血のなかに濃く流れ込んで、いまだに男はモノを集めて貯めようとする、というのが一つの説。

二、王国を支配したがる

ギリシア時代に代表される王たちは、多民族を駆逐、侵略し、領土の拡大に努めた。専制君主として、国と民を収め、その頂点に立つため、絶対的権力を行使したのである。寝首をかかない側近を周辺に配置し、美女と財宝を貯え、その欲望はとどまるところがない。ときに、その欲望の大きさに耐えかねて、失脚していく。

男はすべて、生まれながらの「王」なのである。これが、モノを集めたがる心理の根拠である。

兄弟同居の子ども部屋でも、机一つを与えられれば、その周囲に玩具や本、脱ぎ散らかした衣服などを配置し、引き出しのなかには、さまざまなガラクタを溜め込む。子どもの引き出しを見せてください、という企画を雑誌ライター時代に提案して却下されたことがあるが、今でもおもしろいと思っている。引き出し一つ分を全て取り出し写真に撮る。そこに、十歳なら十歳のオトコなりの、世界観ができあがっているはずなのだ。

たとえ、消しゴムのちぎれた切れっぱし、道で拾った瓶ビールの王冠、壊れた玩具の一部分などゴミに近いものであっても、それを大事に思い、捨てずに取っておくというところに、すでに「オトコ」が芽生えている。

他人には理解できなくても、自分の気に入ったものを集める。それが引き出し一つであっても、彼にとってはその空間は領土で、集まったモノは財宝だ。その「支配欲」によって、オスとしての自分を成り立たせているとも言える。

心理学者から受けた解説は、もう少し学術的だったような気もするが、要点はまちがっていないはずだ。目からウロコが落ちる、というほどの画期的な説ではなかったが、とりあえず、男がモノを集める根底にあるものは、この解説で納得がいった。

男は男としてこの世に生まれついてから、みんな原罪のように、モノを集める習慣を背負っているのだ。